

京大から発信「森里海連環学」

命と自然があまりにもおそろかにされ、混沌を深める世界。物の豊かさと引き替えに心の豊かさを失いつつある日本。世代から世代へと受け継がれてきた自然や文化を壊し、再生への責任をとならないまま解決を先送りしかねない今日。科学や学問はこれらの問題の解決にどのように貢献できるのか、が問われている。こうした問いかけへの挑戦として「森里海連環学」が動き出した。

二十世紀後半における科学技術の進展は、物質的豊かさをもたらした。反面、専門分化し過ぎた科学の弱点は、多様なつながりの総体として成り立っている地球生命体に予想を超える深刻な亀裂を顕在化させることとなった。人類生存にとって最も根本的な地球環境問題の解決には、異分野を統合し、これまでの細分化した科学が欠落させてきた専門分野間のつながりに焦点を当てた二十一世紀型の科学の創生が強く求められている。

京都大学では、一九九〇年代後半より二十一世紀を展望して地球環境問題の解決に貢献し得る体系的な教育研究体制の整備を進め、二〇〇三年四月には、理学研究科附属瀬戸臨海実験所(和歌山県白浜町)、農学研究科附属演習林(北海道・京都府・和歌山県・山口県)、亜熱帯植物実験所(和歌山県串本町)、水産実験所(京都府舞鶴市)を統合して、全学のフィールド研究や教育を推進する組織

豊かな自然再生へ

「フィールド科学教育研究センター(フィールド研)」を発足させた。フィールドに根ざした具体的な問題は極めて総合的であり、その問題への多面的な研究から科学の統合化を実現させようとしている。

*

私達の日本は、幸いにも今なお国土の大半を森で覆われ、四面はこの上なく多様な豊かな海に囲まれている。日本人の原風景としての森や川や海は姿を大きく変えながらも、まだかろうじて再生への可能性を残している。本来、森は川を通じて海と不可分につながり、海もまた森へ水や物質を循環させてきた。しかし、二十世紀後半における森林の荒廃、河川の水路への改変、自然の循環を無視した都市の巨大化は、海に浄化能力を超える負荷を与え、沿岸域の生

物生産や漁業生産に深刻な影響を及ぼしている。

森の国であり海の国である日本のオリジナルなアイデアとして、森と海のつながりに里の原理を関連させ、新たな統合学問領域「森里海連環学」を創出し、世界へ発信することは、行き詰まった今日の日本が進むべき方向を示す問題提起である。それは地球生命体の循環系や免疫系の再生にもつながる大きな挑戦でもある。京都大学には世界に誇るフィールドサ

◆「森と里と海のつながり」対話集会と企画展 24日午後1時から5時30分まで、京大百周年時計台記念館で対話集会が開催される。講師は田中克、畠山重篤氏のほか安田喜憲・国際日本文化研究センター教授ら。また、京大総合博物館で8月29日まで企画展を開催中。問い合わせは京大フィールド研(☎075・753・6414)へ。

科学の統合を目指す

イエンスの伝統があり、また文化の源泉としての京都には文理融合の優れた土壌がある。つながりの科学としての「森里海連環学」は京大から発信するにふさわしい学問領域と考えられる。

*

今動き出した「森里海連環学」は、直接的には森と川と海との自然

的ならびに文化的つながりの説明を目指している。それは豊かな自然再生の必要条件ではあるが、それだけで現実の困難な状況を打開できるものではない。すでに二十

年近く前より、森が荒れると海がおかしくなることを現場から直感した漁師さん達は、自ら山に登り源流域に木を植える活動を各地で展開している。こうした運動の先駆者、宮城県気仙沼の畠山重篤氏

(牡蠣の森を募る会代表)は「森は海の恋人」運動を進め、今や世論の形成に大きな役割を果たしている。「森里海連環学」は、新たな学問のあり方として、こうした社会運動とも深く結びつき、人々の「心に森」を築き、私達が失いかけたつながりの価値観を思い起こさせることをも目指している。



新たな「森里海連環学」がグローバルサイエンスとして定着するために、京大フィールド研は熱帯域から亜寒帯域に多様なモデルフィールドを設定し、国内外の研究機関と連携した共同研究へ踏み出した。今「森と里と海」のつながりをテーマに、総合博物館企画展と時計台対話集会を企画し、市民の参加を呼びかけている。